

負けず嫌い

漫画家 柴門 ふみ

性格としては、負けず嫌いだと思う。70歳近くなってもこの気性は治らないらしく、段ボールで届いた家具も説明書を見ながらひとりです

チから組み立ててゆく。夫や子供たちに手助けしてもらうこともできるが、何だかそれでは負

けた気がして悔しいのだ。つくづく厄介な性格だと思う。

この性格を改めたいと思うのは、眼鏡を新調する時だ。乱視に加え老眼も進み、光にも減法弱くなった近年、しょっちゅう眼鏡を作り変えている。そのとき欠かせないのが、視力検査である。

「読めますか？」

検査の人に聞かれると、ぼんやりとしか確認できない小さな文字でも、

『〇』です」

私は強気に答える。視力検査のひらがなは、たいいてい「つ」か「と」か「く」である。勘に頼ってでも諦めたくないのだ。読めませんと、

なかなか素直に答えられない。小さい字が読めないことが悔しい。そんな気持ちが行動に出るのだろう。試験と検査は違々と頭でわかっている、この負けず嫌いな性格に馴染んで数十年、矯正するのは至難の業なのだ。

その結果、本当の視力とは異なる視力に基づいた、微妙に合わない眼鏡を手に入れることになる。

私の実年齢は68歳である。「あなたはもうお歳ですから」とはつきり言われても腹は立たない。同じように「もう老眼は仕方ないですよ」と言われても、そうだなあと思う。しかし、「読めますか？」と聞かれると「読めません」とは言いたくないのだ。競い合うように『へ』です」と答えてしまうのはなぜだろう。

どうも私の中で、「この勝負だけは負けたくない」という基準があるようだ。

幼いころ、私はトランプで負けると大泣きして悔しがった。母が思い出話としてよく語ってくれた。そんな私も成長し、結婚したその年に夫を連れて実家に帰省した時のことである。父を交えて家族麻雀をしたのだが、その局

は私が大負けをした。すると母が、

「どうしようつ。じゅんちゃん（私の本名）が大泣きする！」

真顔で声を上げた。もはや20歳を過ぎ、結婚

もしていた私は麻雀で大敗したからと言って泣く人間ではなくなっていたのだが。

ゲームに負けると一瞬は、あ、とはなるが、すぐ忘れて悔しくはない。それが大人になってからの私の「基準」である。基本、ゲームや運動のジャンルは苦手なので、負けて当然の気持ち強いのだ。

そうか。何となく自分では得意と思っていたことに「負ける」と悔しいのだな。絵も、子供のころから描くことは好きだったけれど上手ではなかった。なので漫画家になってから「絵がヘタだ」と言われても、悔しくはなかった。今振り返ると、もっと悔しがればそれをバネに練習をして、もっと上手な漫画家になれていたかもしれない。絵の上手い漫画家を見て凄いなあとは思っても、私は悔しいと感じたことが無いのだ。

不得意なジャンルで負けると「恥ずかしい」

とは感じるが、悔しくはない。さらにもっと突き詰めると、最も不得意なジャンルでは負けは笑っちゃうくらいの「不思議現象」となり、感動に繋がる。

私が最も苦手なものは、歌唱である。とにかく音痴なのだ。大勢の人の前でのカラオケは、拷問に近い。頭の中に正しいメロディは流れるのだが、口をついて出る音は完全に外れている。おそらく脳の神経と声帯が連動していないのだろう。口笛は音程通り吹けるのだから、そうとは思えない。

カラオケは、避ける。しかし、日常では意外な場所で音感を試されることがある。たとえば、教会での葬儀に参列して讃美歌を歌う時。見事に、外す。また、仏式の法事で唱える般若心経も外す。お経は楽曲である。音痴とそうでない人との差は歴然だ。また孫が出来、絵本を読み聞かせようとして音読もまたメロディであると感じかされた。

思いもかけない場所でも音感は試されるのだ。それはなぜだろう？人類にとって音楽はなぜ深く関わっているのか？そんなことを考えるの

は楽しい。生命の深淵に繋がりそうだ。不得手から感動に繋がるとは、こういうことなのである。

なんとなくわかってきた。私はずっと視力が良く三十代までは左右の視力がともに1・5あったのだ。眼鏡やコンタクトレンズとは無縁で生きてきた。それなのに四十代以降一気に老眼が進み、眼鏡をかけざるを得なくなった。

視力が良いことが私の得意だったのに。それを失い、得意を否定されたこととおそらく「負け」た気持ちがかみ上げてくるのだ。

私が視力検査で無駄な負けず嫌い精神を発揮する要因は、多分ここにあるのだ。